

翻訳とは形式を移すことである

李 春 喜

I. 始めに

外国語の翻訳というと、外国語で書かれた文の意味を読み取って、それを日本語に置き換えるというイメージを持たれる方が多いのではないのでしょうか。

例えば、以下に引用する短文は、Robert Swartwood が編集した、英単語 25 語以下で書かれた「超」短編アンソロジー、*Hint Fiction* に所収されている Sophie Playle の “For Her Own Safety” という作品です。全文を引いてみます。

For Her Own Safety

She was allowed photographs.
She ran her fingertips around frames, tears
welling. But she didn't lament; she just wished
they hadn't removed the glass.

この短編の意味を読み取れるのでしょうか？ 中心人物である女性は、おそらく、精神科病棟（刑務所の独房かもしれません）のようなところに入院しているのではないかと想像します。病室へ写真を持って入ることは許されたようです。目に涙を溜めながら、フォトフレームの縁を指でなぞっています。目に涙が溢れてきますが、彼女は過去を悔いたり嘆いたりはしません。ただ、フォトフレームの硝子だけは外さないで欲しかったと願うだけです。なぜでしょう？ それは、何かの拍子にフォトフレームの硝子を使って彼女が自死するのを防ぐためです。ですからタイトルは “For Her Own Safety” なんですね。ここまで思いつくことができれば、あとは日本語訳を考えるだけです。以下に、ここで理解したことをもとに、この作品を翻訳してみたいと思います。

彼女の安全のために

彼女は写真を持って入ることを許された。

フォトフレームの縁を指でなぞっていると、目に涙が溢れてきた。

しかし、彼女は過去を悔やんでいるのではない。ただ、フォトフレームの硝子は取り外さないで欲しかったと思うだけだ。

いかがでしょうか。特に上手い翻訳だとは思いませんが、原文の意味は取れているのではないのでしょうか。しかし翻訳は、原文の意味が理解できればよいというものではありません。以下のセクションでは、翻訳における形式の問題について考えてみたいと思います。

II. 韻を踏む

日本を代表する翻訳家で、東京大学名誉教授の柴田元幸氏は、*The Ring of Words* という詩のアンソロジーに収められている Russel Hoban の “Homework” を以下のように翻訳されています。原作の全文と、柴田氏の翻訳を紹介します。まずは英文から。

Homework

Homework sits on top of Sunday, squashing Sunday flat.
Homework has the smell of Monday, homework's very fat.
Heavy books and piles of paper, answers I don't know.
Sunday evening's almost finished, now I'm going to go
Do my homework in the kitchen. Maybe just a snack,
Then I'll sit right down and start as soon as I run back
For some chocolate sandwich cookies. Then I'll really do
All that homework in a minute. First I'll see what new
Show they've got on television in the living room.
Everybody's laughing there, but misery and gloom
And a full refrigerator are where I am at.
I'll just have another sandwich. Homework's very fat.

一読してお気づきのように、原作の英文は2行ずつ脚韻を踏んでいます。この詩の形式のことを “rhyming couplet (押韻対句)” と呼びます。この詩を翻訳する場合、意味を理解するのはそれほど難しいことはありません。しかし、原文の持つ2行ずつの脚韻はどのように日本語にすればいいのでしょうか。

次に、柴田氏が翻訳ワークショップで披露された訳文をご紹介します。

宿題

しゅくだいがにちようのうえにすわって にちようをぺしゃんこにつぶしてる
しゅくだいはげつようのにおいがする しゅくだいはものすごくふとってる。
おもたいほんに プリントのやま わかんないもんだいがどっさり。
にちようのよるはもうほとんどおわり、さあこれからしっかり
やるぞしゅくだい だいどこで。まあまずおやつかな、
それからじっくりとりくむぞ あ そのまえに そうだな、
チョコサンドクッキーをちょっと。そしたらいいよ
しゅくだい かたづけちゃうぞ。まずはみておきたいよ
ちゃのまのテレビで しんばんぐみを。
みんなたのしくわらってるけど ぼくは うれしいと かなしみを
こころにかかえ まんぱいのれいぞうこをにらんでる。
もひとつサンドイッチたべよう。しゅくだいはものすごくふとってる。

いかがでしょうか。言うまでもなく、英文解釈のレベルでは何の問題もありません。しかし、注意深く読むと、日本語の訳文も2行ずつ脚韻を踏んでいることが分かります。原文で、“flat-fat”、“know-go”、“snack-back”、“do-new”、“room-gloom”、“at-fat”と韻を踏んでいる箇所が、日本語訳では、「つぶしてる-ふとってる」、「どっさり-しっかり」、「おやつかな-そうだな」、「いいよ-おきたいよ」、「ばんぐみを-かなしみを」、「にらんでる-ふとってる」と、英語とは異なる音ではありますが、原文と同じように2行ずつ韻を踏んでいます。

このように、ある言語を別の言語に翻訳する場合、意味さえ合っていればよいということではなく、原文の持っている形式も別の言語に移すことが大切です。意味に重点を置いた翻訳を「形態的に等価な翻訳」と言い、意味は多少犠牲にしても、形式を重視した翻訳を「機能的に等価な翻訳」と言います。

意味を犠牲にして、形式を重視した翻訳の例を、鴻巣友紀子氏の『英語と日本語、どちらがう？』から引いてみたいと思います。

同書の中で鴻巣氏は、Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* の一部を取り上げて次のように解説されています。鴻巣氏が引かれた英文は次の箇所です。

As she said this, she looked up, and there was the Cat again, sitting on a branch of a tree.

“Did you say pig, or fig?” said the Cat.

“I said pig,” replied Alice.

鴻巣氏は、「これを語義通り『ブタと言ったの？ イチジクと言ったの？』と訳すとどうでしょう。聞き間違いやナンセンスのニュアンスが消えていまいます」と形態的に等価な翻訳に問題提起をされています。そして、鴻巣氏の生徒さんの訳例を引かれます。

「ブタって言ったの？ フタって言ったの？」

もとの英語には「フタ」に対応する単語はないのですが、“pig”と“fig”の言葉遊びを活かすために、原文にはない「フタ」という日本語を“fig”に当てることによって、「ブターフタ」と韻を踏ませ、意味よりも形式を優先させています。

Ⅲ. 性別と年齢

さて、“Homework”の翻訳には、翻訳に関わる問題がまだあります。みなさんは、原文の英語を読まれたとき、英語の“I”を男の子と思われたでしょうか、女の子と思われたでしょうか？

実は英語では、一人称“I”の性別が、男性か女性かはっきりしないことがよくあります。この詩の原文を読んでも、語り手“I”の性別が明確になる箇所はありません。しかし柴田氏は、原文の“I”を男の子と決め（それが「正解」という意味ではありません）、訳文の中でも「ほく」という一人称を選択されました。したがって、訳文全体のトーンも男の子が話しているような感じになっています。柴田氏は男性ですから、原文を読んだときに“I”を「男の子だ」と思われたのかもしれませんが、もし、女性の方が英語の原文を読むと、“I”は「女の子だ」と感じられるかもしれません。いずれにせよ、性別が判断できない一人称に対しては、翻訳家の責任において性別を決定しなければなりません。この点も文芸作品の翻訳の難しいところです。

さらに、翻訳を読まれてすぐに気がつかれたように、柴田氏の訳文には、タイトルを除けば漢字が使われていません。それは、この詩の語り手を、まだ漢字をよく知らない年齢（小学校の低学年くらいでしょうか）に設定し、語り手の幼さを演出するためです。もしこの訳文に漢字が多く使われていたら、原文の英語の雰囲気とはずいぶん違ったものになったのではないのでしょうか。

英語にはアルファベットの26文字しかありませんが、日本語の場合、漢字・ひらがな・カタカナと3種類の文字がありますので、その3種類の文字の「混ぜ具合」に工夫が必要です。漢字の多い文章だと、大人で学歴も高い人物が書いたかのような雰囲気になりますが、ひらがなの多い文章は、幼い人が書いた（話した）印象を与えます。

繰り返しですが、外国語を日本語に翻訳する場合、ただ単に意味を移し替えばいいという

わけではなく、登場人物の属性を読み取り、その人物の「語り口」みたいなものも日本語で再現することが大切です。そのためにも、原文を深く読み込む必要があるのです。

Ⅳ．内面の思考

以下の英文を読んでみて下さい。

All This

Your arm and hand cock back instinctively, although they have never moved like this before, because your firstborn has taken a piece of your thigh between her two-year-old, sharp and white incisors, and it surprises you to find your arm in this position, you who dress her naked dolls so they won't look cold, but her teeth take deeper hold and drive everything out of your head except, oddly, your own father saying "silly bitch" when you were five and left your bike out in the rain and also the sound, so compelling, of skin hitting skin and, even more oddly, something your aunt told you about your grandfather boxing your father's ear so bad it bled rough red stuff from the eardrum—all this, even the love you feel for both these men, rushes through you so fast you understand for the first time—your hand descends—the phrase "seeing red" and the only thing between your hand and child is your puny intellect scared shitless in some corner, so that just before your hand hits the tender part of her thigh, the part you had kissed just twenty minutes ago when changing her diaper and before she screams, your daughter looks at you first in disbelief and then in complete comprehension, as though, perhaps, she knew these stories all along, and you wonder, with terror, as you've never wondered before, if this is the history you've been trying to write.

もの凄く読みにくい英文だと思われなかったでしょうか？ それは当然だと思います。お気づきのとおり、この短編には「.」（ピリオド）が最後に一つしか使われていません。つまり、これだけの量の英文が形式的にはたった一文から構成されているのです。おそらく、ふつうの意味の「ライティング」の授業では「悪い例」として挙げられるような文章だと思います。しかしこれは、Jerome Stern 編集の *Micro Fiction* という短編のアンソロジーに収められた作品です。内容はともかくとして、ピリオドが一つしかない原文の形式を、いかに日本語に翻訳すればいいのか考えたとき、私はどうしても、日本語の読点と句点を使わざるを得ませんでした。そこで、原文の雰囲気（幼い娘に太腿を噛まれてかとなった母親が、思わず暴力をふるってしまったことを内省する意識の一瞬の出来事）を日本語に移すために、以下のように翻訳

してみました。

こういったことすべて

二歳になる上の子が、白くて鋭い前歯で私の太腿を噛んだ。今までそんなことは一度もなかったのに、私は自分の手を反射的に振り上げた。そして自分の手の位置に驚いた。その手は、娘が遊ぶ人形が寒い思いをしないように服を着せた手なのに。しかし、娘の歯は私の太腿に深く食い込み、私は頭の中が真っ白になった。奇妙なことに、私の頭の中にあっただのは、私が五歳のとき、雨の中に自転車を放りっぱなしにしたために父親に「馬鹿やろう」と怒鳴られたことと、肌と肌がぶつかる激しい音だけだった。さらに奇妙なのは、叔母が私の祖父について語ったことだ。私の父親は祖父に殴られ、鼓膜から血が吹き出したそうだ。この二人の男性に抱いている私の愛情も含めて、こういったことすべてが私の頭の中を一気に駆け巡った。振り上げた手を降ろすとき、私は初めて「激怒する」という言葉の意味を知った。振り上げた私の手と娘の間には、私の頭の片隅で怯えたように残る微かな知性が存在するだけだった。ほんの二十分前におむつを取り替えたばかりの私の手が、娘の太腿の柔らかな部分—おむつを替えるときにそこにキスをしたばかりなのに—を叩く直前、そして娘が泣き叫ぶ直前、娘は最初、信じられないという様子で、そして次に、すべてを理解した様子で、まるでそれまでの話を最初から全て知っていたかのように私を見つめるのだった。私は今まで、そんなことを考えたこともなかったが、私が今まさにこれからしようとしていることは、これまでに何度も繰り返されてきた歴史を続けることなのではないかと恐ろしくなった。

つまり、訳文では読点と句点を使わずにいられなかったので、「登場人物の頭の中で一瞬よぎった意識」という雰囲気を出すために、苦肉の策として、訳文全体を斜体文字にすることにしました。斜体文字は、登場人物が実際に声に出して発言したのではない内面の思考を表現するために、翻訳ではよく使われる手法です。そうすることで、その文章が、語り手もしくは登場人物の通常の発言ではなく、語り手や登場人物の声にならない意識を表現したことを表します。この方法が最善だったかどうかは別にして、内面の思考というディスコースを翻訳する場合も、意味以上に、その形式をどう表現するかということに工夫が必要です。

V. 形式を移す

私は2020年からコーネル大学教授で現役の作家でもあるJ・Robert・Lennonの作品を翻訳していますが、J・Robert Lennonの*Pieces for the Left Hand*という短編集に“Copycats”と

いう作品があります。少し長いですが全文を引用します。

Copycats

Our town is famous for its deep, beautiful mountain gorges spanned by one-lane bridges, and it is from these bridges that local would-be suicide typically jump. On a recent bright October morning, a young man, a student at the university, was found dead at the bottom of a gorge by two hikers. Police discovered in the student's dormitory room a torn scrap of paper on which were scrawled the words

can't
go on

and the death was ruled a suicide. This news was a great shock to the student's friends and family, who knew him as fun-loving, even hedonistic, and much was said about how you can't truly know anyone, and how each of us, ultimately, is alone in the world.

In the days that followed, a rash of copycats suicide ensued, each with his own scrawled suicide note explaining that he too could no longer go on, and that it was only the first student's decisive act that convinced him there was a way out. Further misery and mourning overtook the community and high fences were promptly erected atop the bridge railings.

Not long afterward, the original suicide's roommate returned from a vacation and presented to police the rest of the paper that the suicide note had been torn from. Restored, the note now read:

Midterms over, dude! I totally can't
wait for this party. You can go on
without me if I'm late.—B.

Around this time police also discovered the suicide's hat caught in the branches of a tree growing in the gorge, and a scrap of fabric caught in a bramble which matched the suicide's ripped pants. They theorized that the student had attended a party, gotten drunk, lost his hat in a gust of wind and fallen to his death attempting to retrieve it.

Through still in mourning, the young man's family was consoled to hear that their relative had not been so unknowable after all. However, the parents of the copycats have sued the police department and are expected to be awarded more than fifteen million dollars in damages.

この作品は、自死した大学生が残したメモを読んで、同じような悩みを持つ若者が、彼の真似 (copy) をして次々と自死を決行するという物語です。最初に自死した大学生の残したメモの断片には “can't/go on” とだけ記されていました。翻訳すると「これ以上無理／先に行く」という感じになるでしょうか。しかし、物語の途中で、彼が書き残したメモの全文が見つかります。そしてそこには、次のように記されていました。

Midterms over, dude! I totally can't
wait for this party. You can go on
without me if I'm late. — B.

翻訳してみます。

中間テストが終わったぜ、よう！
飲み会待つのはこれ以上無理。
オレが遅れても先に行くんだぜ。Bより

つまり、大学生が残したメモは自死をほのめかすものではなく、「オレが遅れたら、飲み会に先に行っておいてくれ」ということをルームメイトに伝えるだけのものだったのです。ところが、そのメモが破られてしまって、「これ以上無理／先に行く」という部分だけが読まれたために、大学生は自死したのだと誤解されたという物語です。

この短編も、意味を理解するだけならそれほど難しいことはありませんが、引き裂かれて残った断片に書かれていた文字一言一句を、そのままとの全文の中に収め、さらに、その断片だけを読むと自死を覚悟した大学生の「遺書」のようなものにならなければならないというところに工夫が必要でした。その結果が上に引いたような訳文になったというわけです。これも、翻訳の機能的側面を活かそうとしたものだと言えます。

VI. リポグラム

最後に、リポグラムを翻訳した経験をご紹介します。

翻訳とは形式を移すことである (李)

Pieces for the Left Hand の作者と同じ J・Robert・Lennon の作品に *Let Me Think* という短編集があります。その中に “Lipogram for a Passover Turkey Knife” という短編が収められています。全文を引用します。

Lipogram for a Passover Turkey Knife

In days of old, scimitar-swinging warriors struck mighty varmints with skillful swords, slicing in uniform blows until stacks of juicy hunks burnt scrumptiously upon smoky coals. Humans of today lack such manly vigor and cunning know-how. That's why Magna's Compact Victual Cutlass is your handy chum, particularly on holidays and similar important dining occasions, at which unvarying chow width is a must. Call to mind, won't you, Grandma's famous animosity toward nonproportional foodstuffs? A Magna-brand shiv is your crucial tool for maintaining familial harmony on days of holy sup. Buy a Magna now, sit back, and tuck it in without worry. Magna: Sharp Shanks for Choosy Culinarians.

リポグラムとは、特定の文字を使わずにある程度まとまりのある文章を書くというある種の言葉遊びです。有名なところでは、筒井康隆氏の『残像に口紅を』があります。筒井氏の作品の場合、章が進む毎に使える文字が減っていき、最後には「い」「か」「が」「た」「ん」など、数文字しか使えなくなってしまいます。そして最後に残った文字が「ん」というわけです。

J・Robert Lennon の “Lipogram for a Passover Turkey Knife” は「広告文」のパロディで、「マグナ社の包丁は切れ味が鋭い」という内容の広告がリポグラム形式で書かれているのですが、アルファベットのある一文字が使われていません (タイトルは除きます)。それは “e” です。

アルファベットの “e” は、英語の中で最も頻繁に使われる文字ですから、“e” を含まない単語だけを使ってまとまった量の文章を書くのはかなり困難だと思われます。しかしノン氏は、そこを工夫して、“e” を含まない単語だけで「包丁の広告文」を書き上げました。それが “Lipogram for a Passover Turkey Knife” です。

この “Lipogram for a Passover Turkey Knife” を翻訳するとき、私は新たな問題に直面しました。この短編の文字どおりの意味を日本語にするのはそんなに難しいことはありません。参考までに拙訳をご紹介しますが、少し変な調子の日本語になっていることがお分かりいただけると思います。

過越しの祭り：シミタール刀のためのリポグラム

その昔、シミタール刀を振り回す勇者の巧みなナイフさばきは、強靱な害獣を寸分違わず切り刻み、スモークの立ち昇る炭火を用い、その害獣が、肉汁たっぷりの美味な塊になるように火をとおした。今日私たちは、そのような活力と巧みな技術を失った。だからこそ、マグナ社のコンパクト調理ナイフは、お祝いの場や大事なお食事の際、気軽に皆さま方のお役に立つことが可能となるのだ。そういう場に必要なのは、いつの時代も、皆さま方に微笑をもたらす美味なる食事なのは明らかだ。皆さま方は、お祖母様が、不揃いに配分したお食事に不快感をあらわにするのをご記憶のことと思う。マグナ社のナイフは、厳かなお食事の際、皆さま方が仲良く時間をお過ごしになることを可能にする必須の道具なのだ。今すぐマグナ社のナイフをご購入いただき、心煩わすことなく、そのときをお待ち下さい。「マグナ社ナイフ：違いの分かる料理人の好む鋭さ」

英文の意味を理解し、それを日本語にするだけならそれほど困らなかったはずですが、原文はリポグラムで書かれています。その形式をいかに日本語で表現するかというところに工夫が必要でした。

英語の場合、26文字のアルファベットの中から1文字使えないというだけで、文章を書くのはかなり難しくなります。とりわけ、最も頻繁に使われる“e”を含む単語が使えないとなると、それは困難を極めます。ところが日本語の場合、濁音・半濁音・促音などを含めると72文字ありますから、たとえ1文字使えないという制限があったとしても、かなり自由に文章が書けます。それでは原文のリポグラムを日本語に移し替えたことにはなりません。そこで私は、“Lipogram for a Passover Turkey Knife”を翻訳するとき、/え/という母音の音を含む文字はすべて使わないことにしました。つまり、「え」はもちろんのこと、「け」「げ」「せ」「ぜ」「て」「で」「ね」「へ」「べ」「ぺ」「め」のようにその文字の音に/え/という母音を含む12文字も使わないことにしたのです。その結果出来上がったのが上にご紹介した翻訳というわけです。

翻訳の良し悪しはさておき、ここでは再度、翻訳とは、外国語で書かれた文章の意味だけを他の言語に置き換えることではなく、もともとの原文が持っていた形式も含めて他言語に置き換える行為であることを強調しておきたいと思います。

VII. 最後に

人工知能の精度が凄まじい勢いで伸びている現在、仕事や、それ以外のことでも、必要に迫られてやらなければならない翻訳があると思います。むしろ、そういう翻訳が大部分を占めるのではないのでしょうか。でも、そういう翻訳はどんどんデジタルに任せればよいと思います。しかし、電卓があるのにそろばん教室に通う人、自動演奏ピアノがあるにもかかわらずプロの

ピアニストに生演奏を依頼する人、おそらく近い将来、車は自動走行するにもかかわらず、自分で車を運転したいという人はいなくなるはず değildir。それと同じように、生成 AI を使えば外国語を理解したり外国語を書いたりするのに困らないはずなのに、それでも、自分で外国語が使えるようになりたいと思う人は今後も存在し続けると思います。

私たちが現在使っている日本語は、ご存じのとおり、古くは漢文、明治以降は欧米の言語を翻訳することをとおして今あるような日本語になりました。歴史という長い試練をくぐり抜けて現在の日本語になったというわけです。ですから、これからも、「自分で英語ができるようになりたい」という人たちが「おもしろい！」と思う海外の作品を発見し、それらの作品を、翻訳者自身の生身の言葉で翻訳することをとおして、私たちの日本語がますます豊かなものになっていくことを願っています。

引用文献

- Avallon, Joanne. "All This," *Micro Fiction*, edited by Jerome Stern, W. W. Norton & Company, 1996, pp.66-67.
- Hoban, Russell. "Homework." *The Ring of Words*, Faber and Faber Limited, 1998, p.64.
- 鴻巣友季子, 『英語と日本語、どっちがう?』NHK 出版, 2025, p.53.
- Lennon, J. Robert. "Copycats." *Pieces for the Left Hand*, Granta Books, 2005, pp.14-15.
- Lennon, J. Robert. "Lipogram for a Passover Turkey Knife." *Let Me Think*, Graywolf, 2021, p.74.
- Playle, Sophie. "For Her Own Safety." *Hint Fiction.*, edited by Robert Swartwood, W. W. Norton & Company, 2011, p.67.
- 柴田元幸, 「翻訳ワークショップ」2013年3月20日, 神戸市外国語大学.
- 筒井康隆, 『残像に口紅を』中央公論社, 1989.

